

第5章 札幌トモエ幼稚園における 基礎的人権教育の実践

第4節 自然環境の中で人間の豊かな感覚を養う動物行動学的実践

人間は本来素晴らしい感性を持っている。自然な環境の中で成長すれば、人間は誰もが本能的で動物的な直感を発揮することができるはずである。しかしながら、近代化し都市化した生活環境の中では、人間本来の豊かな感性と動物的な直感は失われつつある。それはちょうど、動物園の檻の中で生まれ育てられた二世三世の動物たちが、生殖能力をはじめとした野性的な本能を失いつつあるのに似ている。

自然の中には、人間の豊かな感受性を刺激する要素に満ちている。俊敏な身のこなしや危険回避といった動物的な本能も、美しいものを美しいと感じ表現する美的感覚も、自然の中でこそ養われる。それらは人間の作ったカリキュラムによって教えることのできるものではない。人間の教育力には限界がある。それ故に、自然に頼って実践しているのである。

動物的な本能はまた、他者との関係性の中で身につけていく。現代社会では、乳幼児期に人と親しくふれ合う体験が少ないため、大人になってから人と関わり合うことを恐れる人が増えている。人は人と共に生きる社会的な動物であり、他者と関わり合うことができない心の病の増加は、人間にとって深刻な問題である。

人と関わり合うことの基礎は、乳幼児期の生活環境にある。家族内だけではなく、たくさんの人と親しく関わり合うことが、人間の感性と本能を養うことになる。中でも、おどけたりふざけたりじゃらけたりする親しい人間関係が、たいへん重要である。

動物の赤ちゃんは仲間たちと団子のように絡みながら、じゃらけあって遊ぶことによって、その動物特有の社会的ルールなどを学んでいくのである。人間も乳幼児期に、子ども同士あるいは大人たちと、おどけ、ふざけ、じゃらけあって遊ぶことが必要である。身体も心も共に他者とふれ合い、ぶつかり合うことで、自然な形で相手の存在と自分自身の存在を認識し、他者との関わり方を身につけていくのである。

この時期にこそ、多くの人と関わり合いながら、自己を主張し相手を受け入れることを学ぶ必要がある。乳幼児期には「許す・許さない」という概念がない。先入観や固定観念なしに、相手のあるがままを受け止めることができるのが乳幼児である。多くの人と親しく関わり合う中で、身体をぶつけ合い、感情をぶつけ合うことで、自己の表現を見つめ、自己を認識し、自己をコントロールしていく術を身につけていき、人を許すことのできる寛容な人に育つことができるのである。

トモエでは、人間が本来持っている豊かな感性と動物的な直感を養うために、自然の中に生活基盤を創り、他者と親しく関わり合うことのできる生活環境を創造している。

子どもは男女の協力の基に育まれるべきである。両性の特徴を生かして、バランスのとれた生活環境を創るために、男性スタッフが多く参加している。女性スタッフによる母性的な抱っこやおんぶ、男性スタッフによるダイナミックな肩車や闘いごっこなど、スタッフと乳幼児とのスキンシップは多様である。子どもたちと同化し、心を通わせ合っているスタッフの姿を通して、親たちは子どもとの関わり方を体験的に学んでいる。

子どもたちは自然の中で動物的な本能と直感を養い、自分自身や他者に対する理解を深めていく。また、自分自身の豊かな感性を信じて、表現したり行動したりすることができるようになっていく。

多くの主体的な体験から、様々な状況に対応できる感覚を身につけているのである。

事例（24） 雪と戯れる冬の活動は楽しくて美しい！

自然の中での活動は、刺激的な素材に満ちている。木に登ったり崖を滑り降りたりしながら、身体的な運動能力と共に、危険を察知し回避する本能的な能力なども自然に身につけていく。四季折々の変化と共に、自然は人を繊細に、たくましく育ててくれるのである。

次のレポートは、ある母親による冬の活動のひとこまの報告である。

去年の5月に体験で初めてトモエに来た頃、園長やチエコの口から「トモエは冬が一番おもしろい」との言葉を何回か聞いていた。でもその時は、え～本当？というのが正直な気持ちだった。春のトモエの自然はとてもよかったし、第一、その頃住んでいた東区の地下鉄沿線付近では、冬に外で遊んでいる子はほとんどいなかったからだ。幸い？うちには雪かきという仕事があったので、娘は1才の冬から、雪かきの時には外でなんやかややしていたが、夏の間、近所の公園であんなに0才から中学生まで入り乱れていた子たちが、雪が降った途端、見事に姿を見かけなくなる。確かに公園は雪捨て場になってたけど、それはそれで、なかなかおもしろい場所なんだけど…。春になって、やっと姿を見かけて、「冬の間、何してたの？」と聞くと、お母さんが「家でごろごろしてたよね」なんて言ってる。朝から夕方まであんなに遊んでいた恐るべきパワーは、冬の間、どこで消化されるのだろうか。

今の私は「トモエは冬が一番おもしろい」と共感できる。大きなお腹のため、そりすべりも尻すべりも沢散策も山散策も、イグルーの中にさえ入ってないけど、しかも「今年は雪が少なくて物足りない(チエコ談)」らしいけど、それでも思う。やまとが、「子供達は冬に一番筋肉がつくんですよ。全身使うから」と言っていたが、本当にそうだ。雪山をよじのぼり、転げ、屋根や木から飛び降り、埋まりつつ歩き、バランスをとりながらすべり、雪を掘り、埋め、運び、転がして…本当に全身を存分に使っている。他の季節ならこうはいかない。痛いし、汚れるし(ってのは私の都合だけど)。つくづく雪という素材、冬という季節は素晴らしいと思う。

先日、うちに遊びに来た友人親子をトモエに連れてきた。土曜日で、ちょうど小学部の日だった。トモエに遊びに行けることも、中に入っていることも、友人は驚いていた。いつもは禁止されているところを、「まあここならいいか」と母に許可され、年中の彼は、雪をかき氷5杯分くらいは食べただろうか？

「うちの子の行っている幼稚園は、園庭にそりすべりできる坂すらないの。」「友達の子供が行っている保育園は、ウェアは別としても、帽子とか手袋は毛糸とかの天然素材のものじゃなくちゃだめなんだって。トモエはそういう決まりはあるの?」「ここの敷地は、休みの日はチェーンでもしているの?」

…ああ、そうか…。トモエ外の人と話をすると、あらためて気づかされるが多々ある。ここの自由さを、懐の深さ、豊かさを。そして、この自然と多彩な環境だからこそ、冬は楽しいのだと…。

降った雪の量や気象条件で、山や木は全然違う顔を見せてくれた。本当に毎日違った。葉の落ちた枝の向こうに広がる空の色は、他のどの季節とも違う、こっくりとした青。なめらかにふっくら積もった雪の上に、点々と続く動物の足跡。突き出た枯れ枝の形は、雪の白とのコントラストでいっそう美しく映えている。吹雪の日も、なんだか探検をしているようで笑ってしまうのだ。この冬一番印象的だったのが、雪の降り始めの頃の光景。1本1本の木のすべての枝に雪が着いて、木の完璧な姿

が、まるで雪の結晶のように白く浮かびあがるのだ。あれは、雪が積もって2日め。クローバー広場から沢に向かって子どもたちがそりをすべっている間、私とヒロくんのお母さんは、木々を前にして「きれいだね～」「すごいね～」とため息をつき、そして「冬こそトモエだね～」と確認しあったのでした。

冬が終わってしまう。名残惜しいけど、出産を控えてドカ雪でも降られても困るので、冬礼讃はこれくらいにしておこう。でも今日、久しぶりに聞いた、傘を打つ雨の音も、なんだか嬉しいものだった。ここなら、どんな季節も楽しめるのだろう。この幸せを、一人でも多くの子供に（大人も）体験してもらいたいと心から思うのです。

事例（25） 自然の恵みと共生する子どもたち

雄大な自然は、人の心を癒してくれる。ゆったりとした時の流れの中で、自然は人を包み込み、自分を見つめ直す余裕を与えてくれる。人間が自然と共生していた時代には、現代のように深刻な心の病が蔓延することもなかったであろう。人は自然なしには生きられないものである。この実践研究において自然にこだわり続けているのは、そのためである。

次に、春の親子の様子を紹介する。母親のレポートである。

アイヌ伝説に「オキクルミ」という物語があります。人間と神々が、邪悪な魔物と戦う話です。

ある日魔物が、山間いから上って来る太陽を一飲みにしてしまおうと、大口を開けて待っていました。その地に住むアイヌの人々は、どうしたら太陽が飲み込まれずにすむのか考えたあげく、魔物の口の中に、キツネを次々に放り込みました。

「魔物がキツネを噛み砕いている間に、太陽は無事に上ってゆくことができた。なぜ人々がキツネを使ったのかというと、それはキツネの数が、それだけ多かったからである。」

その後魔物は、オキクルミという勇敢な神に退治されることになります。

トモエのウサギ小屋の前に立ち、私はこの物語を思い出していました。それは、最近毎朝のように、ウサギにタンポポを食べさせては喜んでいる息子の祥平との、フトしたやりとりからでした。

その朝も祥平は、クローバー広場周辺のタンポポを、一生懸命に摘んでいました。私が無気なく、「そんなに摘んじゃうと、明日の分がなくなっちゃうかもよ」と言うと、「だいじょうぶ。また、ちゃんと咲いてくるもん」と、手を休めることなく、さらりと答えました。

確かにそうでした。前の日も、その前の日も、彼はタンポポを摘んでいたけれど、今朝も無くなってはいません。おそらくタンポポの季節の間中、次から次へとつぼみが開き続け、祥平の、この朝のおつとめを満足させてくれるのでしょう。

“自然の恵み”の本来の姿というのは、こういうことなのかも知れません。子供が手折ることのできるタンポポの数は知れています。それは、自然の持つ復元力が、十分に補ってくれるものです。自分の肉体のみを用いて、人間が自然に及ぼせる影響は、本当はごく僅かなのです。

それは干渉ではなく、共生の一場面にすぎません。共生の領域をわきまえていた頃、大自然は人間にとって、無限性を備えた恩恵であったでしょう。

産業革命以後、テクノロジーという大仕掛けな道具によって、生活は随分便利になりました。そして、私を含めた殆どの現代人は、生身の自分の体ひとつが自然に対して示せる力の、謙虚なまでの非力さを忘れてしまいました。

トモエで過ごす祥平が「タンポポは無くならない」とあたりまえのように信じる姿は、“オキクルミ伝説”の中でアイヌの人々が、たくさんいるキツネを用いた行為と同じなのだと思います。それは、決して動植物を軽んじているのではありません。たゆまない自然の力とその大きさを認め、安心してその恩恵を受ける姿です。人と自然のバランスがとれている時だけ生まれる、信頼関係なのです。

機械を駆使して、地球に多大な干渉をし続ける今、自然はもう私達にとって無限ではなくなりました。それを認識する時、未来への大きな不安が伴います。先進国に広がる不気味な閉塞感も、このあたりが背景だと私は考えます。だからこそ、トモエの

『摘んでも摘んでも、咲くタンポポ』

『捕まえても捕まえても、現れるカタツムリやカナヘビ』

『濁しても濁しても、澄んでくる沢の流れ』が、子供達、そして親達にとって、どれほどの安息をもたらしていることでしょうか。生き物が生き物として、地球上で生きてゆくうえでの、基本的な安心感だと思うのです。

この自然の恵みに似たもの、というよりむしろ同じものが、子供にとっての親の存在かもしれません。貪っても貪っても、時にワガママやイタズラをしても、尽きることなく与えられる親の愛情。目や言葉での会話やスキンシップをしながら、いついかなる時も、親の愛で自分の周囲が満たされていることを感じて、自分の存在や未来に安心感を得るのでしょうか。永遠性のあるもののみが与えてくれる、理屈抜きの平穏です。

社会全体が数多い問題を抱えている今、せめて私は祥平にとって、無限を感じさせる大自然でありたいものです。

やがて私が年をとり、おばさんからおばあさんになる頃に、祥平もきっと「母の存在は有限であったか...」と思うのでしょうか。でも、トモエでの体験と併せて、無尽蔵な母の愛情が、成長した彼の力強い土台となっていることを願って止みません。しかしこの私に、一体そんな資質や力量があるのでしょうか...。う~ん...

そんな事をとりとめもなく考えながら、ウサギ小屋の前でポーッとしていると、背後から呼ぶ声がしました。振り返ると、陽ざしの中、ひととおり摘んだタンポポの束を手に、嬉々とした祥平がこちらを見て立っています。彼のバックの新緑が眩しいほどです。北海道の春のすがすがしい風は、“オキクルミ伝説”の時代から、遙かな年月を経て吹いてくるかのようでした。

事例（26） 枯れ葉から人間の野生と童心を取り戻す

自然の素材を創意工夫して活用することによって、親子の活動はダイナミックに広がっていく。スタッフのひとりによる、秋の活動のレポートである。

黄色や赤に色づいた山々も少しづつ淋しくなり、今ではもう、木々に葉はほとんど残っていません。今年は気候のせいかわれ年ほどの美しさではなかったようでしたが、それでも、日毎に変化してゆく葉は、私達の目や耳や手足や鼻や舌や、その他あらゆる私達の感覚と感性を、たっぷりと刺激してくれました。

子供達と遊んでいる最中にふと顔を上げると、時々すてきな瞬間を目にすることがあります。ほんの少し残っている葉が風に吹かれると、木全体が動いてヒラヒラキラキラして見えます。なんだか、木が笑っているようにも、歌っているようにも見えるのです。そんな時、私は、時が止まってしまっ

たかのように感じてしまいます。ただただ見入ってしまいます。心が少し軽くなります。はたから見れば、単にボーッとしているようにしか見えないかもしれませんが。

一枚だけふんわりと目の前に落ちてくる葉。突風で空いっぱい群舞する葉達。二人でカサコソささやいている葉。大勢で談笑している葉達。それぞれに趣があります。

枯葉といえばヤキイモですね。火をおこして、イモやカボチャを放り込み、あとは集め放題の枯葉をふんだんに使って、じっくりと焼き上げる。メラメラと燃える火をながめ、アツアツのイモをほおばると、人として都会の生活の中で失ってしまった野性を、少しだけ取り戻したような気になります。電子レンジでチンしたイモもいいけれど、やっぱり焚火はホッとします。

ところで、ただ焼いただけのあのイモ、なんであんなに美味しいんでしょうね？ 私達は文明病に侵されてしまっていて、カロリーやらビタミンやら栄養素をどれだけ摂ったかということばかりに考えを奪われがちですが、本当は、ものを食べるということは、きっと、イモという物質だけではなく、親子や仲間達との会話、笑い声、その場の風景や雰囲気といったものまで、全部一緒に食べているんですよ。

からだの健康のためにも、心の健康のためにも、やっぱりトモエでみんなで食べる焼きイモが一番！

「ちえこに気をつける」は真駒内公園に行った時のみんなの合言葉。枯葉をかかえてウロウロしているちえこさんには、決して背中を見せてはいけません。子供達はもちろんですが、大人達もワーワーカーカー、ものすごい勢いではしゃぎまわるのが、とっても不思議。(もっとも、枯葉がなくても、芝をむしって大はしゃぎしてますが...)

突然頭の上からふりかかってくる枯葉の、あの感触。背中やズボンの中に入ってしまった時の、あの気分。土くさい、あのおい。そして、何にもまして、誰かにかけてカーといわせた時の、あの快感。

大人も童心に帰って熱くなって、枯葉のかけ合いっこができるのも、やっぱりトモエならでは。通りかかるおじさんおばさんが、どんなに冷やかな視線をなげていこうとも、こればかりはやめられません。大声をはりあげて走りまわると、確かにからだはくたびれますが(前はそんなにくたびれなかったんだけどなあ)、気分はスッキリさわやか。

自然の美しさに心奪われることも、野性的な感覚を仲間達と満喫することも、童心に帰ってからだを動かすことも、私達がより私達らしく生きる上で、とても大切なことだと私は思います。トモエでの生活の中で、毎日の体験から、私は私自身を創っているのだ、ということを経験を通して改めて思う今日このごろです。

事例(27) 何もなくて不便でも、豊かな人間性にあふれている国

利便性を追求し続ける文明社会が人間の心に強い悪影響を及ぼしていることは、誰もが認めることであろう。次の手記は、4歳男児と1歳女児の母によるものである。夫の実家であるギニアに旅して、物質的には何も無いが豊かな自然と人間関係のある社会の中で3か月間を過ごすうちに、男児が急速に変化していった様子が見事に表現されている。

今年の5月から8月にかけてギニアに滞在していたのですが、トモエに帰ってきてから、「ギニアってどんな所なの？」とか「向こうでの生活はどうだった？」等いろんな人に聞かれていましたが、

なかなかまとまってお話する時間がなく、進まない筆にイライラしながらやっとうにかまとめたので、紙面をお借りしてお伝えしようと思います。

私たちがギニアに行く事になったのは、夫の父の具合が急に悪くなり、高齢だったので、健太郎や萌に少しでも元気なうちに会わせて方がいだろうという事で、一家4人で出発する事になったのでした。

ギニアには5月中旬に到着したのですが、雨期の始まりの時期で、雨が降り始めるらしいのにちっとも降らず、ものすごい蒸し暑さと夕方になると蚊の攻撃で夜は全然寝れないし、水も電気も1日数時間しかこない。夜中にトイレに行こうと起きると、はなれにあるので水を汲んでろうそくを持って行かなきゃならない。恐くて半ベソかきながら行ってました。日本での便利な生活にすっかりマヒしていた私は、初日からすっかりまいってしまいました。健太郎と萌はというと、こんなものすごい暑さの中で扇風機もクーラーもないのにガーガー寝ていて、子どもってすごいよなあとつくづく思ったのでした。

最初の一週間はおなかをこわし、元気がなくて一日ゴロゴロ寝たり起きたりして過ごしていました。外は乾期の終わり、日中は35以上になるので、萌をあやしなから家の中にいるのですが、そのうち近所の子ども達がやってきて萌を抱っこさせてと言うのです。4・5才の小さい子達なので大丈夫かなと思ったのですが、みんなすごく慣れていて、ひょいと萌を小さい背中に背負おうと、持っていた布でくるりと包んで上手におんぶするのです。ちなみにギニアのフラ族の言葉で、おんぶはバンベと言うそうです。日本語でじゃがいもというのがありますが、ギニアにもジャガトウという野菜があったり、葉っぱはハーコ、ネネはお母さんなど、日本語と意味や音が似ている言葉がたくさんあり、びっくりしました。

私達が滞在していたのは夫の兄の家で、家族は12人。その他に親類から預かっている大学生2人、病気のためにケネコという小さい村からやってきた父と母、その父母の友達というおじいさんも一緒に滞在し、総勢20人弱。その他に近所の人や親戚がしょっちゅう来ているので、最初は誰が何人住んでいるのかさっぱり分かりませんでした。朝子ども達が学校に行く時間は戦争です。9人の子ども達が大きなお皿をかこんでわけあって食べるのですが、遅れると自分の分はなくなってしまうので、みんな必死です。主食は主にお米ですが、時々とうもろこしをゆでてつぶしたものや、クスクス、パンも食べます。お米にはマーフェと呼ばれる肉や魚や野菜を煮込んだスープをかけて食べます。このマーフェは赤いパームオイルを大量に使うのですが、ギニアでは野菜をたくさん食べないので、このオイルからベータカロチンを摂っているのだそうです。みんなが出かけてしまうと、お母さん達は近所の市場に出かけます。そこで今日の食材を買うのですが、新鮮な肉や魚、香辛料や果物類、石鹸や衣類など色とりどり、本当にたくさんのもものが売っていました。炊事洗濯等は家の外でするのですが、近所の子どもがやって来て手伝ったり、通りがかりの人とおしゃべりしながら仕事をします。夕方、日が沈む少し前になると、みんな大きなたらいに水を汲み体を洗って、一家全員集まり、お祈りをします。夕食が終わると、子ども達は集まってコーランの勉強を始め、大人達はそれぞれ今日あったことなど話し合ったりして過ごします。

毎日、昼間は子ども達がかわるがわる萌を抱っこしてくれるので、私はゆっくり休むことができ、とてもありがたかったです。日本だと私一人しかいないので、休みたくても休めずイライラしてしまうこともありました。健太郎はというと、すぐに子ども達と友達になって炎天下の中走り回っている。言葉は通じないのに、健太郎が何か言うとみんなその日本語をまねて、それがおかしくてみんなで大笑いしている。おもちゃとか何もないのに、子ども達は石ころや落ちている缶を拾って車を作ったり、

赤ちゃんをあやしたり、どこでも元気いっぱい。

私も子ども達からいろんな手遊び歌や石けりを教えてもらいました。トモエに入った当初、健太郎は小さい子をたたいたりしていて、ギニアでもやっていたのですが、しばらくすると自然にかかわり方がわかってきたのか、たたかなくなりました。私が何度言ってもやっていたのでだんだん心配になっていたのですが、本当に自然にそれがなくなり、気がついたらあれっ？という感じでした。

そうしているうちに義父の手術をする日がやってきて、私も病院まで送ることになりました。とにかくこちらでは家族がたくさんいるので、義父が入院した時でも誰か一人がつきっきりということはなく、地方に住んでいる夫のきょうだいも全員やって来て、みんなで交代で看病していて、団結力の固さにはびっくりしました。仕事も定時から定時という働き方ではなく、ほとんどが自分の商売をして生計を立てているので、店を閉めてちょっとぬけてくるとか誰かに任せるとか、とても自由でした。仕事中でも誰か尋ねてきておしゃべりしたり、気楽に見えるのですが、逆にストレスがたまらないんだらうなと思いました。

とにかく日本には何でもあるけど何も無い。物はあふれて便利だけど、ぜんぜん楽じゃない。ギニアは何もなくて信じられないくらい不便だけど、すごく精神的にも肉体的にも楽。人が多い分、もめごともあります。これで涼しくて蚊がいなかったら天国だよな。ギニアに少し慣れてくると、最初の半ペソはどこへやら、そんなことを思ったりしました。義父は手術した後、容態が悪くなり、点滴をつけたまま朝から晩までずっと寝ている状態が続きました。ギニアで2番目に大きい病院だったのですが、クーラーも冷蔵庫も何もなくてベッドがあるだけ。家族は床にゴザを敷いて寝泊りし、食べ物も毎日家から持ってきていました。それでも健太郎や萌が祖父に会いにいくと、よほど嬉しかったのでしょ、ずっと手をにぎっていました。私は夫に「お父さん、日本から孫が会いに来たから嬉しくて元気になっちゃうよ」と言ってたのですが、奇跡的に義父は回復し、起き上がって少し歩けるようにまでなりました。

ギニアに来ていろんな人と接しているうち、とても感心した事があります。それは大人達の子どものしかり方がとても上手なことです。私なんかはつい感情的になって怒ってしまうのですが、子ども同士ケンカして片方が泣かされてきたら、そのお母さんは子どもたちの前で泣いている子の涙をすくう真似をし、「この涙は誰の、誰のー？」といいながら相手の子の顔の前で両手をパンと打って「この子だ！」「あれこっちの子かな？」また違う子の前でパンと手をたたきます。子ども達がアハハハと笑いだすので、泣いている子もつられて笑い、またたたいて気まずい思いをした子も笑い始め、そうしているうちにまたみんなで遊び始めるのです。ギニアに滞在している間、この光景をよく見ました。お母さんだけでなくお父さんや大きいお兄さん、お姉さんもこれをよくやっていて、ギニア語で「ポポポポ、コオ」と言いながら手をたたくのですが、実際は意味はないそうです。でも日本語にするとそういうニュアンスなんだらうなと思いました。ギニア人の子どもに対する考え方とか接し方が、これによく表われているように思いました。ケンカは子ども同士でするもの、でも子どもが泣いてその人のところに来たら、どっちの子も気まずい思いをする事なく大人が少しだけ手をかしてあげる。子ども達がまたもとの場所に戻れるように。怒るのではなくなくさめるのでもなく諭すのでもないそのやり方は、ギニア人のやさしさとかおおらかさなんだらうと思います。夫が、「食べる時、ギニアではみんな大皿に盛って分け合って食べるんだよ。一人一人お皿があって食べていると他の人のこととか考えないけど、一つのお皿で大勢で食べれば他の人のことを考えながら食べられる。それがギニアのスタイルなんだ。」と言っていました。

炎天下の中。6・7才の小さい子ども達がオレンジや氷を頭のかごにたくさんのせて汗水たらしな

がら売って歩いているのを見たり、手がない小さい子どもがものごいをしていたり、日本とギニア、幸せなのはどっちなんだろう、といろいろ考えさせられる事も多かったです。日本に帰ってきてから、健太郎は見違えるように他の人とのコミュニケーションがうまくとれるようになり、自分が我慢したり受け流せるようになったりもできるようになりました。前はすぐに手が出ていたので、すごい進歩です。「健太郎の大事な物、それは誰々と誰々だよ」と本当に友達が大切みたいです。私にとってはカルチャーショック連続のギニア滞在でしたが、健太郎や萌にとっては精神的に大きく成長した旅だったのだらうと思います。

私たちの帰国の日、人前で泣いたことのない義父がボロボロ涙をこぼしていました。私は胸がいっぱいになって「ありがとう」と言うのが精一杯でした。車に乗りこむと子ども達がいっせいに駆け寄って来て、いつものようにキラキラした目で、「日本に行くの？また遊ぼうね。」と明日また会うような調子で言うのです。子どもにとって時間や距離、言葉や国籍も、そんなものは関係ないんだろうなと思いました。「そこにいて一緒の時間を過ごす、そうしたらもう友達なんだよ。」とされているみたいでした。私は何か大切なものをもらったみたいで嬉しくなり、子ども達に「また遊ぼうね。ぜったいだよ。」と約束しました。健太郎は「バイバイ、バイパーイ！」いつまでも大きい声でさけています。だんだん小さくなっていく子どもたちの顔、顔、とうもろこし畑、赤い土の道…。ギニアも少しずつ変わっていくのだらうけれど、この素朴な子ども達はいつまでも変わらずにいてほしい、このままずっと大人になってほしい、そんな事を思いながら8月の上旬、私たちはギニアを後にしました。

事例（28） 親子関係を逆転させてみたら…

トモエでは、抱っこ・おんぶ・肩車など、濃密なスキンシップによって、互いに心を通わせ合い、親しい人間関係を創造している。次の母のレポートには、親が子どもに同化してじゃらけあい、子どもたちがスタッフと闘いごっこを通してじゃらけあっている一例が記されている。

素晴らしかった！今日の子どもまつり。少々どころかものすごく感動した。この感動が冷めないうちにと、あわてて家へ帰り、ペンをとりました。

今回の、というか今年は、ほとんど行事に関しては何もしていない。去年は精一杯自分の中ではやっていたので、今年をあえて(?)何もしていません。何もしてないけど、その中で沢山の発見がありました。今回の子どもまつりも「何かしようか」という気持ちが湧き起こるのだけど、それはたぶん「何かしなきゃ」の気持ちから。「何しようかな～」と先パイお母さんにつぶやくと、「そういう時は何もなくて子どもと楽しんじゃえば？」と明るくサラッとってもらったことで、「あっ！そっかぁ」と思えたのがとても幸いでした。ありがとう。おかげでまたひとつ素晴らしい発見がありました。

さて、トモエに来てからあわてて紙のお金を作り、おサイフも作りヒモもつけて隆史に手渡しました。「このお金は子どもしか使えないお金だからね、何か欲しいものがあったら自分で考えて使ってね」ワクワクした顔の隆史に私もワクワク。ムクムクとアイデアが湧いてきた。それは、日頃というか毎日私達の間で繰り広げられている「ママ！これ買って」の逆バージョン!!ふふ。

お店屋さんは本当にどれもステキで、すっかり子ども気分の私は、隆史と手をつなぎ、しっかりおだった。「あっ、かわいい風船！」「紙ヒコーキ！」「あ～、みてみて、折り紙のアクセサリー!!」と、

おだった私に半分あきれ顔の隆史。さっそくアクセサリー屋さんでおねだりしてみました。可愛いハートの指輪が色とりどりに並んでいて、どうしても欲しくなり、「これ買って！10円だから2つほしい〜！」とたのんでみた。しかし彼はキッパリと「ダメ、ダメだよ、1つにして!!」とゆずらない…。どっかで聞いたセリフ…。なんてガンコなんだ。私は時々おやつ2つ買ってやっているというのに。しかも年に1度のことなのに。アタマにきて、「2つ!」とごねた。…結果は、1つしか買ってくれなかった。次にウイナー屋さんの前を通りかかり、あまりのいいニオイに「これこれ!!」と催促すると、「後でねっ」とつれない返事。彼はスタスタとアイスクリーム屋さんへ…。ついていくと、カワイイ帽子をかぶったお姉様たちのアイスが食べたいようで、彼は列に吸い寄せられた。「後ろに並ばなきゃ」というと、そばにいたやさしいお母さんが「いいよいいよ、入っちゃっても」みたいな感じで前をゆずってくれた。これは完全に横入りだぁー。でもすごく嬉しかった。そして、メチャおいしいたこ焼きも買ってもらい、どうしても食べたかったウイナーもゲットし、喜びにひたりました。

ふとその横を見ると、おいしそうな焼きそば…。これはどうしてもはずせない。「買って〜!!」とたのむと「ダメ!おなかこわすでしょ!」「ダメ!」の連発。「ダメ」を繰り返されるとすごく悲しくなり、恥も外聞もなく大きな声まで出してしまった末に、やっと買ってもらった。ごめんね隆史、ヘンなお母さんで。でも、日頃の彼のせつない気持ちを実感しました。だって私の口調そのまんまなのだ。ダメ!を連発するのはもうやめようと反省しました。

おなががいっぱいになったところで、ゲームに参加。ボクシングなんてやっているではありませんか。輪投げは長い列だし、さっそくボクシングに参加。でもここで私はとてつもない光景を目にしてしまったのでした。はじめは隆史や他の子達の勇姿に「いいぞ〜!いけ〜!」ってな気分に応援していたのだけど、よく見ると、この目の前で繰り返し広げられていることの素晴らしい意味に気付いてしまい、ぜひともお手伝いしたくなり、勝手にアシストさせてもらった。だって、ただのボクシングじゃないんだもん。

それは、本当に懐の大きい大人が子ども達の力や心を全身で受け止めている作業でした。1人2人と子どもが列を作り始めました。順番を待つ彼、彼女達はみんな興奮気味です。この気持ちを受け止めるということは並大抵ではないはず。どんどん目の色を変えてパンチしてくる子ども達はそれはそれは迫力があり、時に恐ささえ感じます。何がすごいかというと、その子のパンチを受けながら、その子に合った力加減でパンチを出し、倒れ、声をあげるその大人。日頃からじっと観察したり触れ合っているからこそできることだと感動しました。

子ども達は次第にいろんな気持ちを自分のパンチに込めて力いっぱいぶつかり、大人を倒して、それはそれは嬉しそうな顔で「やったぁ!!」と飛び上がりました。私はそれを間近で見せてもらいながら、色んな事を思いました。「自分より絶対的に強いものに受け止められて打ち勝つって、どんな気持ちなの?」と聞きたくなる気持ちをおさえていました。そんな私を見ていた男の子が、「おれ、ジュンジュンとやりたい」と言ってくれました。まさと先生と交代してすでにうっすら汗をかいているオヤジが、「オレもジュンジュンと勝負したい」と…。それなのに私は何かこわくて、「やる!」と言えませんでした。たしかに寝違えた首も痛かったし、声も出しすぎてクタクタ、でも何かが私にストップをかけました。でも何かを感じて声をかけてくれたことがとても嬉しかった。

こういう大人達からの愛を無条件に受けるという意味は、それを受けた子どもにとって計り知れないものがあるでしょう。それをさりげなくやってしまう小さいまさたとオヤジは汗びっしょりになって戦っていました。

このトモエでは本当にさりげなく、こんなに素晴らしい事が繰り広げられている。「こんなことしていいの？」と心配してしまう人がいたり、色んな反応があって当たり前だろう。だって私達大人は子どもの時こんな風に体ごと受け止めてもらったり、大人に負けてもらったりしたことがない人の方が今断然多いのじゃないだろうか。大声出して泣いたり怒ったり笑ったりできるということが、どれだけ大切な意味があるのか。それをできなかった大人の方がはるかに多い今、トモエの素晴らしさをキャッチできて本当に良かった。ここに入ると決められた自分さえもほめたくなる。

良いものは人に伝えたくなるし、分かち合いたくなる。育児や他の事で余裕もないけど、でも大切なことは誰かに伝えたいな、と思いました。それにしても、米澤先生、船山先生、本当に今日は素晴らしいものを見せて頂きありがとうございました。子ども達に大きな愛をありがとうございました。普段さりげなく繰り広げられているこの作業の裏側を垣間見ることができて、良かった。本当に園長先生、ありがとうございます。スタッフの方々にも感謝です。そして何かの形でこの思いを誰かに伝えていきたいと強く思います。“子どもまつり”という行事の中で色んな大人達のさりげないあったかい気持ちに触れることができた貴重な一日でした。

P S . このボクシングを少し離れたところから真剣な真っ直ぐな瞳で見ていた少年は、何を感じていたのかな？

事例（29） 子どもとの闘いごっこに込める大人の気持ち

闘いごっこは、男の子と女の子を問わず、大好きな活動のひとつである。互いに絡み合っ、上になったり下になったり、身も心も激しくぶつかり合う。トモエでは、6名の男性スタッフを中心に、父親たちも交えて、毎日のようにあちこちで闘いごっこが繰り広げられる。ダイナミックな活動は、たくましさを養い、相手への配慮を身につけ、人間関係の幅を広げる。

～なぜ男の子は闘いごっこが好きなのか～

子どもたち、特に男の子たちの多くは闘いごっこが好きです。多くの幼稚園の教師の中には、闘いごっこのような野蛮な遊びを好まない人も多くいると聞きますが、僕はむしろ積極的な意味をそこに見えています。

そもそも男という動物は、女よりは縄張り意識が強く、攻撃性も強い生き物です。ものの本によると、男はテストステロンという男性ホルモンの影響に支配されていて、そのホルモンは順位闘争や縄張り争いで、能動性と攻撃性を発揮するということが動物研究で明らかにされているといいます。男は生まれながらに戦闘的なのでしょう。子どもたちの闘いごっこは、まさに彼らのヒトとしての自然な行為なのです。（多分、テストステロンの作用は他にも、一番になりたがったり、自分の作った基地に他人を入れないといった行為にも現れているのでしょう）

～A君の闘いごっこへの道～

最近、今まで余り参加してこなかったA君が、ずいぶんと闘いごっこに参加してくるようになりました。去年まではそうした場面に近づいてくるともほとんどなかったA君。彼はそのころ、まだ大人の顔色をうかがうという感じが強くて、他の場面でも自分を素直に出すということは少なかったのです。僕がちょっかいをかけても、それにのってくるということはありませんでした。気になりながらも、スーッとその場からいなくなるという感じが強かったのです。当然、そのころは友達との関係も十分ではなかったといえます。子どもたちはシビアーですから、話しかけたりニコッとほほえみか

けたりした時、それなりの反応が返ってこなければ「何だ、あいつ」という感じで相手にしないということになります。そのころの彼はまさしくそんな感じで、他人を受け入れるには越えなければならないハードルがありました。

もともと自分を強く持っているところがあって、僕がしつこくちょっかいをかけたなり誰かが冗談でからかったりするとはっきりと「ヤメロー！」と怒ったりする面がありました。そういう意味では、周りからは一目置かれていたところもあったようです。そのうち彼も徐々に変わってきて、他人を受け入れる面を出してきました。最初は、何となくおもしろいことをしているところのそばにいたり、遊んでいたものを「貸して」と言われて貸してあげたりしている程度でしたが、そのうち気の合う仲間を見つけてその人たちに合わせて遊ぶようになりました。相手に合わせて遊ぶということは簡単なことではありません。少なくとも相手に合わせても失われない自分というものを持っていない限りません。もしかすると、自分を強くもてるようになって相手に合わせられるようになるというよりは、相手に合わせてみることで自分を確認していく（自分を強くしていく）ということなのかもしれません。そうした意味では、身近に気の合う人がいる、相性の合う人がいるということは大切です、環境としてはいろんな人がいることでそれが満たされるということです。

緑組（年中組）も終わりの頃、彼は友達と一緒に僕との闘いごっこの世界にたびたび顔を出すようになりました。しかしまだ逃げ腰といった感じで、僕が大きな声で「コノヤロ～、つかまえてやる～」などと叫んでにらみつけると、サ～ッと逃げていってしまうのでした。それでも徐々に仲間たちと一緒に僕にもかかってくるようになりましたが、その最初の関わり方はひどくぎこちないもので、後ろから本当に思いっきりけとばしてくるといったもので、受ける僕としてもたびたび顔をゆがめるほどでした。

青組（年長組）になってからでしょうか、彼は仲間たちとふざけ合って、園バスの中でも大きな声で「ウンチ」「しっこ」「オチンチン」と、この時期一度ははまり込む世界に浸りました。大人を目を気にする彼にしたなら、最初、大人の前でそのようなことを言うのはとても勇気のいることだったでしょう。しかし、そうした表現を受け入れてもらえることで、彼は自分の自由な表現を大人たちは受け入れてくれる、その多くを大人たちも楽しんでくれるということを感じ取っていったようです。

このころから彼は男の子たちが闘いごっこをしているところにずいぶん近づき始めました。それでも自分がかまらぬように、まだ後ろからかかってくるが多かったのですが、力の加減を少しずつコントロールすることも覚えていきました。そうなのです、コントロールすることは体験を通して学ばなければならないのです。ライオンや猿の子ども同士がじゃらけ合うように、かじったりつかみかかったりひっかいたりといったことを通して、自分の力の加減を学んでいくのだと思います。最近ですと彼はごく自然に闘いごっこに参加し、つかまっても怖がったりもせず力の加減も上手になり、本当に楽しみながら闘えるようになっていきます。

～僕が闘いごっこをする背景には～

僕は子どもたちと闘いごっこをしている時に、時々自分が子どもの頃のことを思い出します。僕の幼児期、あるいは小学生になってからもそうでしたが、その当時プロレスがテレビ放映されていて、僕の父は毎週それを楽しんでみていました。そして時々僕と一緒にプロレスごっこをしてくれていたのです。父は時にジャイアント馬場になり脳天からたけ割りややしの実割りを、また時には悪役ブラッシーになりかみつき攻撃をしてきたりデストロイヤーになって四の字固めをしてきたりと、それは多彩な攻撃を仕掛けてくるのでした。一度僕の攻撃が父の顔面に当たり、父が鼻血を出したことがありました。鼻にちり紙でツッペをしながら、父はプロレスごっこをしてくれました。僕は内心「大

丈夫かな？」と心配しながら続けていましたが、いつもと変わらない父の攻撃を受けながら「大人って本当に強いんだなあ」と心の底で感じていたのです。同時に僕は心のどこかで、「鼻血が出ているのにどうしてプロレスごっこを続けてくれるのだろう、何かそこには直接現れていない父の気持ちがある」ということを感じていたようにも思います。

僕の体の中には、あの頃父とやったプロレスごっこの感覚が残っています。それは今の僕が子どもたちとの間で大切にしているじゃらけあいや闘いごっこ、またそこでの相手との関わり方というものの基礎になっているのだと思っています。そしてさらに、それはそこに大人としての気持ちを込められる基礎にもなっているのだと思っています。

～たかが闘いごっこ、されど闘いごっこ～

僕は子どもたちとの闘いごっこにいろんな気持ちを込めています。大人への構えが強い子にはそれが少なくなるように、手加減がまだ下手な子にはそれがわかるように、自信をなくして落ち込んでいる子には自信がもてるように、スキンシップが必要な子にはそのように…。多分、父が僕とのプロレスごっこに自然に何かの気持ちを込めていたように…。僕はA君のように闘いごっこができるようになり変化していくことを多くの子どもたちの中に見てきました。その中で感じてきたのは、テストステロンは確かにあるということ、つまり人間の自然性に対する信頼のようなものです。それがなければ、僕自身、A君との関わりにも肩に力が入って自然なかたちで（彼のペースに合わせて）関われなかったと思います。つまり、彼に対して自分の気持ちを無理に押しつけていったかもしれません。

トモエには、テストステロンの作用をもっと発揮した方がいい子も、逆に表現される行為を少しコントロールした方がいい子もいます。そうした子どもたちとこれからも、僕が父とやったプロレスごっこのように、自然にしかも何かの気持ちを込めて闘いごっこをしていこうと思います。

事例（30） 子どものケンカは止めないでよ

子どもたちは、素直に自己を表現する。時には他者との激しいぶつかり合いになる。トモエの子どもたちは、年齢に応じて様々なケンカをする。ケンカをした後は、大人では考えられないほどすぐに仲直りをする。むしろ、ケンカをする前よりも関係は深まっている。

ケンカをすることによって、自他の痛みを実感することができる。その実感が、相手への配慮を育み、程度をわきまえた言動を身につけていくことにつながる。

現代の子どもに最も欠けているのが、他者とぶつかり合うことによって得られる体験であろう。他者の痛みがわからず、自己の言動を制御できないで、程度をわきまえない暴力や陰湿ないじめなど、人間関係不全に陥る可能性が大きい。

ケンカを十分に体験している子どもは、ケンカの仕方を心得ている。ある母親は、次のように報告してくれた。

「ささいなことから、男の子たちの間でケンカが始まりました。私はたまたま近くにおいて、彼等の様子をずっと見ていました。

最初は口ゲンカだったのですが、次第に激しくなっていって、とうとう取っ組み合いの大ゲンカになってしまいました。子どもたちのケンカはある程度はやらせておいた方がいいと思ったものの、あまりに激しいので、思わず間に割って入って行きました。

すると、当の男の子たちは、私にこう言ったのです。

『子どものケンカは止めないでよ。ぼくたち、自分たちで解決できるんだから。』

子どもたちはしばらくの間ケンカを続けた後、まるで何事もなかったかのように、また仲良く遊び始めました。さすがだな、一本とられた、と思いましたね。

でも、もしも大人が、あんなふうに激しくケンカをしたら、仲直りなんて不可能でしょうね、きっと。」

事例（31） 子どもには仲間とのトラブルを自分たちで解決する力がある

子どもたちの表現は、びっくりするほどストレートな時がある。ぶつかり合い、ケンカになったり仲間はずれにされたり、様々なトラブルが起こる。

人と人とが共にいて深く関わり合おうとすれば、何らかの葛藤や摩擦があって当然である。しかし大人たちは、みんな仲良くしましうね、と子どもたちに理想を押しつける。自分自身が誰とでも仲良くすることなどできないにもかかわらず。これは、教育という名の暴力であろう。

教育者に必要なことは、トラブルを起こさないように子どもたちを指導することではない。トラブルを通して、子どもたちが自他の痛みを実感し、他者に配慮しつつ自己を主張できるように、援助することである。

人間関係は常に動き、変化している。それは、ひとりひとりの心の状態が不変ではなく、常に変化し続けているからである。

6歳の男の子の例を紹介する。

彼は、いつも6～7人で一緒に活動しているグループのひとりである。が、その日は、彼だけがグループに入れなくていた。気になった私は、子どもたちの会話が聞こえるくらいの近さまで寄っていった。すると、彼が近寄ってきて、こう言ったのである。

「余計な口出しはしないでね。自分たちで解決できるんだから」と。

私は「わかったよ」と言うだけにして、その場を離れ、遠くから彼等を見守っていた。その夜、その男の子は布団に入ってから、母親に、「前は僕も仲間はずれにしていたけど、仲間はずれにするのもいやな気持ちになるんだよね」と言ったという。

自分の気持ちを見つめられる子どもの感性と動物的な直感の素晴らしさに、母親は驚嘆していた。

その後、彼等の交遊関係はどんどん変化していき、互いに相手の気持ちに配慮し合う人間関係を身につけていったのである。

<参考資料>

*毛利甚八氏によるコラム（毎日新聞2005年11月1日「愛された記憶と体験の豊かさと」より）

『小学校に上がる前に子どもを動物として完成させることです。自然の中で、虫や生き物に触れさせて、海や山の大きな環境に身を置く体験をさせる。殺生もするし、小さな怪我也するでしょう。寒さに凍えるときもあるでしょう。そういう体験を通じて、子どもは自分の身体という物差しで、世界を計ることができる。教育という大げさなものではない。子どもに虫の捕り方を教えるには、大人が虫を捕ってみせるしかない。猿の子育てと同じです。潮溜まりの魚を手で掴んだ体験は、個と自然の濃密で完結した、幸福な記憶です。学校の間人間関係とはレベルが違う。虫や魚をじっと見つめる時間を持った子どもは、ゲームを彩るイメージが自然の造形を物真似しただけと見破ることができるでしょ

う。

自然の中で遊ぶのは体力も技術も必要ですから、まずは大人が自然を好きになるといいですね。子どもを、愛された記憶に充ちた、たくましい動物にするために、大人もまた野に遊ぶべきなのです。』

<参考文献>

- * 『なぜ動物は子供をなめるのか』中川志郎（主婦の友社）
- * 『親子学』中川志郎（海田書房）
- * 『素晴らしき動物たち』中川志郎・中川李枝子（フレーベル館）
- * 『動物子育て物語』中川志郎（校成出版社）
- * 『子育て論』中川志郎（エイデル研究所）
- * 『子どもと自然』河合雅雄（岩波新書）
- * 『子どもとあそび』仙田満（岩波新書）
- * 『子どもと住まい』仙田満（住まいの図書館出版局）